
第34回全国ホタル研究大会報告

研究大会の概要

全国ホタル研究会の第34回大会が7月6～8日にかけて、全国ホタル研究会主催、山形県置賜総合支庁、米沢市教育委員会、米沢ホタル愛護会共催、環境庁、米沢市の後援により山形県米沢市で開催され、会員や地元のメンバーなど180名が参加しました。

6日は13時より河鹿荘で受付が始まりました。昼過ぎから降り出した強い雨も小降りになり、予定通り14時30分からバスに分かれて窪晃楽園、小野川ホタル公園、独楽の里の自然生息地、笹原ヒメボタル生息地を見てまわりました。

夕方には雨もあがり、18時30分からは三沢公民館で大場信義氏を講師に「ホタルが自然発生する環境づくり」をテーマに環境学習会が行われました。20時より窪晃楽園、小野川ホタル公園とまわり、最後に笹原ヒメボタル生息地へと向かいました。全国ホタル研究会の多くの会員の方は、普段、ゲンジボタルやヘイケボタルを対象とされており、ヒメボタルを見るのは初めてという方も多く、皆さん感激されていました。

7日は置賜文化センターを会場として大会が行われました。開会式は圓谷事務局長の開会のことばに続いて、古田会長、石山義信山形県置賜支庁総務企画部長、大久保利之米沢市助役が挨拶され、最後に米沢市立三沢東部小学校の児童が歓迎のことばをのべて締めくくりました。

続いて「ホタルの地域固有性と移動」のテーマでシンポジウムが行われました。後藤の司会で、遊磨正秀氏・鈴木浩文氏・大内紘三氏が意見を交換しました。まず、司会から今回のシンポジウムが企画された経緯の説明がありました。続いて各パネリストからの意見がありました。鈴木氏はDNAの分析から、ゲンジボタルは6つの遺伝的なグループに分かれることを明らかにし、移植を行うにあたっての3つの原則（研究会誌34号参照）を提唱しました。大内氏は現在行われているホタルの里づくりについて見直し、単なるイベントではなくしっかりとした調査と計画をもって行われるべきであることを提案し、これを感情的心と理性的心という言葉で表現していました。また、北九州市各地のゲンジボタルのアイソザイム分析から放流による個体群の遺伝子の多様性の消失を報告しました。遊磨氏は種の地域固有性を守らなければならない

のかを説明されました。特に保護という観点から従来「捕獲禁止」という規制は行われていたが、「付け加えも禁止」という視点は見過ごされてきたと指摘され、放流が環境容量を越えさせるような数量的問題だけでなく質的問題も大きく、放流は基本的に行うべきではないとされました。会場からは生息数の回復のため同じ生息地から採集してきたホタルを人工増殖して放すのはどうなのか、周辺にホタルがほとんどいなくなってしまった場所ではどうするのか、カワニナについてはなどの質問や意見ができました。この問題はまだ、会員の中でもさまざまな意見があり、一致した見解を示すのは難しいようでした。しかし、これまでの研究発表から遠距離間の移動については問題があるという共通認識は持てているようで、こうした移動（主に業者によって行われ、しばしば行政の事業に絡んでいる）がないように、各地の会員が取り組んでいく必要があるという意見もだされました。この問題についてはこれからも議論を積み重ねていく必要があると思います。

シンポジウムに続き地元発表として、山形県置賜総合支庁河川砂防課の青山憲二氏により「大樽川河川改修について」と題して大樽川で行われた新しい河川改修の考え方を紹介しました。

午後からは9つの研究発表が行われました。今年の研究発表は学術的色彩が強いものが多く、各地の団体の具体的な保護活動の取り組みや小中学校の発表がなかったのが残念です。今後こうした傾向が続くと発表者が少なくなっていくのではないかとこの危惧も感じました。

研究発表の終了後、休憩をはさんで米沢ホタル愛護会の今洋一氏を議長に総会が開られました（総会議事録抄参照）。総会后、圓谷事務局長より閉会宣言が行われ、大会が終了しました。

夕方からの懇親会は場所を河鹿荘ホテルに移して、各々親睦を深めました。

会 場：山形県米沢市 置賜文化センター

大会日程：

7月6日（金）

13：00～14：00 受付（河鹿荘）

14：30～16：30 見学会（窪晃楽園，小野川ホタル公園，独楽の里の自然発生地，笹原ヒメボタル生息地）

18：30～19：30 環境学習会（三沢公民館）

20：00～21：30 ホタル観賞（窪晃楽園，築沢自然発生地，小野川自然公園，笹原ヒメボタル生息地）

7月7日(土)

- 9:30~10:00 開会式
10:00~11:30 シンポジウム「ホタルの地域固有性と移動」
11:30~12:00 地元発表「大樽川河川改修について」青山憲二
13:00~16:10 研究発表
16:15~17:30 第34回総会
18:30~20:30 懇親会(河鹿荘)

研究発表:

- 古代人とホタル 西山 武
横浜市の都市公園における昆虫類の移植の指針 後藤 好正
ホタルの保護・復元における移植の三原則 鈴木 浩文
山梨県北部におけるゲンジボタルの発光パターンと地理的分化の過程
..... 井口 豊
ゲンジボタルにおけるルシフェラーゼの種内変異 窪田 康男
日本と韓国のヘイケボタルの外部形態と発光パターン 大場 信義
遺伝子から見たヘイケボタルの遺伝的集団 吉川 貴浩
ヒメボタルの人工飼育法と産卵・孵化に関する若干の知見 三矢 和夫
戸隠高原におけるヒメボタル・ゲンジボタル・ヘイケボタル混飛の様相
..... 三石暉弥
(共同発表の場合は発表者のみ)

大会開催地より

第34回全国大会を終えて

大会実行委員長 関谷 寛隆*

この度、全国ホタル研究大会を米沢で開催するに当たり、全国より予想以上の会員の方々や、自然保護の諸団体の参加があり、21世紀初頭の大会として、有意義な内容で盛会の中、無事終了出来ました。全国ホタル研究会事務局始め皆様様の行力に深甚なる意を申し上げます。

当地での開催は、第11回大会に次ぐ2回目の大会で、会員参加者、研究内容等飛躍的な充実した大会となりました。

私達は、この度の米沢大会を21世紀初頭を飾るホタル保護の原点を求め、特に水の世紀と謂われる時代に相応しいものに視点を置き、今迄にない「ふだん着の蛍」を

観賞してもらい、ゲンジボタルよりヘイケボタルやヒメボタルの時期に合わせて大会を選びました。私達の蛍保護は、可能な限り自然の中で保全したいと云う当初からの念願で、施設や養殖等の人為的な方策を極力排し、可能な限り自然発生条件の整備に務めた結果、各種の蛍が共存する地域となり、全国的にも学術的にも高い評価を受けるに至りました。

大会運営も、何処でも誰でも大会が出来るモデルを目指し、経費の節減は勿論、自然環境の充実と、保全の為にボランティア活動の集積とにより、実行委員会も活発に活動して頂きました。

一方長年にわたるマスコミに依る情報提供やテレビに依る蛍保護活動紹介や新聞に依る大会の情報や、蛍と共生する提言等を数多く提供して内外の人々に蛍の生息環境の安全、安心、安寧、な生活環境を訴え続け、大会には「21世紀自然環境保全宣言」を行い、全国的な評価を受けました。

米沢大会は、上杉鷹山公の処世訓であった「自然には心を、人々には愛を、仕事には汗を」を具現して、蛍供養塔やホタルの宮、俳聖の蛍句碑等、未来の人々にもメッセージを残し、現代人にも心の豊かさを念願致しました。小学生に依る環境活動も活性化し、次代の自然保護者育成にも本大会が多大な貢献を致しました。

大会後も、全国各地から蛍保護や自然環境等の研究者や行政当局の研修者も数多く、10月に開催された第13回全国生涯学習山形大会でも開会式を飾るイベント行事に米沢ホタル愛護会が参加、蛍保護を全国に訴えました。「米沢らしい大会」を念じたこの度の大会は、皆様からの暖かい御支援と、大会終了後には全国会員より数多くの御礼の御言葉、御便りを沢山頂戴し、私達も感激して一層の蛍保護活動を行いたいと、決意を新たにして居ります。

会員皆様様の御健勝と、御地蛍活動の成果を心より念じて、大会終了の御挨拶といたします。

* 米沢ホタル愛護会会長

全国ホタル研究会米沢大会を振り返って

大会実行委員会事務局長 蔦 幹夫

第34回全国ホタル研究会が7月6～8日の期間米沢市で開かれました。全国各地、北は稚内、南は久米島から多くの人々に大会へ参加頂きました。今回の米沢大会の実行委員会の事務局長を務めましたが、米沢ホタル愛護会を中心とした民間主体のメンバーによる運営であり、不行き届きの事が多くあったと思います。

今回の大会は次の方針で行いました。一つには、大規模でない、低コストの大会二つには、ホタルだけでなく、ホタルもいる自然環境にも視野を広げた大会を目指しました。米沢大会は研究発表と情報交換・意見交換が十分できる大会で、民間研究者・保護活動者が中心に開催できる低コストの大会を目指しました。大会開催を機会に新規の施設を作ることなく、今あるホタルの自然発生の生息地の保全・再生の状況を見学して頂きました。そして、全国ホタル研究会の会員の多くがホタルを通して身近な自然を保全・再生を目指す中、ホタルだけでなく、ホタルの生息する環境やホタルもいる身近な自然環境についての幅広い発表・報告がある大会にしました。地元発表として、山形県置賜総合支庁河川砂防課の青山憲二氏が「大樽川河川改修について」の題名で新しい河川改修の考え方を紹介しました。大樽川の当初の河川改修計画は河道直線化案で、ヒメボタル生息地の夜鷹原の河畔林の消滅が危惧されました。米沢ホタル愛護会と地元住民の要望で自然環境調査が行われ、ハナカジカ・ホトケドジョウなどの貴重な生き物が見つかり、生物の種が数多く存在する河川であることが判りました。この調査後、計画が変更され、今ある河道に手を入れない、川幅を拡げる改修計画になりました。

今回、「ホタルの地域固有性と移動」のテーマでシンポジウムを行い、後藤好正編集長の司会で、遊磨正秀氏・鈴木浩文氏・大内紘三氏が意見を交換しました。鈴木氏から移動の3原則が提起されましたが、「移動・放流」に関して意見の明確な一致は見出せませんでした。このテーマに関し、全国ホタル研究会で幅広く、多くの意見が出されたことは意義あると思います。「ホタルの発生競争」・「ホタルのペット化」が言われていますが、ホタルの増殖活動での無秩序なホタルやカワニナの移動・放流が社会的問題化している中、全国ホタル研究会はこの問題を討議し、指針を出すのが会としての社会的責務と思います。

米沢大会には初めての大会参加者も多く、初日の夕方、「環境学習会」が大場名誉会長を講師に、「ホタルが自然発生する環境作り」の題目で開かれました。豊富な事例と具体的な内容で、ホタル保護活動の指針作りに大変参考になりました。

大会時期をゲンジボタル・ヘイケボタル・ヒメボタルと一緒に観賞できる期日に設定しました。雨模様で、数多くの飛翔を確認できませんでしたが、自然発生しているそれぞれのホタルと生息環境を見学していただきました。今大会の開催を契機に、地域の数多くの場所にそれぞれのホタルがいて、多くの生き物が生息する自然環境の保全と再生をより一層拡げたいと思います。